

集落の歴史地理続　序

ならんだ紀要が一〇冊。当初、ささやかな論文集だが内容はなかなか充実していると感じ、そして巻を追うにつれて、なるほど体裁は整備されてきたが、やはり一〇冊のあゆみのなかには、正直なところ、多少の消長はあるようだと思ひ、だが一〇年の春秋をあゆんで学会の成長もひとしお。最低の製作費でいいものを作ろうという、体裁は質朴にして、組版は品よく、しかも内容は高くと、かくしてできあがったのがしめて一〇冊、一〇冊ともなれば、最低費の質朴書もまさにちよつとした書架の糧ではある。それかあらぬか、近時、会員外の購入者も多いと聞く。まずはこよなくめでたきことの次第。

もとより、わが学会の紀要たるもの、その使命は学会の成果を世に問い、かつ、これを保存するにあり、具体的には会員の研究成果発表の場を提供するにある。おなじく歴史地理学を志す会員たりとはいえ、それぞれの研究対象方法など、すべて一にあらざ、よつてその成果を収録した論文集なるものは、一貫したテーマをもつて書全篇を構成することの不可能なるは当然である。しかるに、ここに『歴史地理学紀要』は一冊ごとにテーマをもつて編集され、かりに収録論文の全篇がそうではないとしても、すくなくとも、そのテーマが各号の中心にあること、そしてそれが初号以来維持されてきた、ということとは、たしかにこの紀要の大きな特色ではないかと思う。実はこれは、年々の大会にテーマ別のシンポジウムをもつこと、紀要はそのテーマをもつて構成するという、まことに論理的な「単純な理論」によつて、そして単純なればこそ、これまでこの方針が維持され、またこれからも続けることが可能であろう、ということに理由がある。

初めの計画では、九集・一〇集のテーマはともに『集落の歴史地理』、もつて前冊を『集落の理論的研究』、後冊を『集落の実証的研究』とする。けだし、歴史地理にかぎらず、由来集落に関する研究は、地理学他の対象にくらべてその数が多い。二集にわたつて同じテーマをもつたのも、この点に胚胎するからにはかならぬ。さりながら、事はかならずしも計画に沿つて進むものとはかぎらず、余儀なきこととはいひながら、しばしば計画の変更をとまなう。事態は常に編集者をして困惑に陥らしめること再三、前号九集の刊行がややおくれた原因のひとつもそこにあるが、捨てる神あれば拾う神あり、会員

諸氏のご協力によって、つづく今号一〇集は大局にみて順調の歩を踏んだといえようか。

理論的研究とか実証的研究とかいっても、厳密にその区別はさだかでなく、また「実証によって裏づけられる理論」を展開するためには、両者分離して考えることもおかしな話で、それならばこのような区分はいっそない方がよいということになって、両号はともに『集落の歴史地理』九集編集の折、これに(1)を付しても、(2)がはたして続くかどうか、正直にいえば、そんな懸念もあって、今回は名づけて『集落の歴史地理続』。さらにつづけば文字通り「続々」となる？ したがって、九集・一〇集の正統篇を通じての『集落の歴史地理』収録論文は、最初に全論文を集めてそれを系統的に二冊にわけたものではなく、各冊単独に論文を集めたものであるから、正統の間には系統的なつながりはない。

さて、この『続』であるが、収録論文の取扱いの時代はさまざまだ。明治はもとより現代もある。現代もまた歴史なりとして、きわめて広範に研究対象を拡げることは、同時に「その限界をどこにするか」という、歴史地理学の本質的な課題にも絡んでおり、ご承知のように、これについて定説はない。「時代を超えて」はよろしいが、その結果「すべては歴史地理学である」というのでは、あえて歴史地理学の存立を必要としないのではないか。あるいは「歴史地理学」を意図しない歴史地理学の論文もあるかもしれない。しかし、得てして歴史地理学が「間口の狭い年よりの所作事」として評される妄言を許すならば、歴史地理学はいまやその頑迷の壁を打破って若返るべきであるまいか。現代に近い歴史時代の地域研究の正体がどこにあるにせよ、歴史地理学が他を受入れてこれを消化する努力こそ、斯学の新展開をめざす契機となるものであろう。ある意味では蛮勇をもってさえ、われわれはこれに対処する覚悟をもたなければならぬのではないかと痛感する。

歴史地理学的手法を「現代地理」に適用する方法をいかに導きだすか。紀要うまれて一〇年、曲り角に立つか立たぬかは別として、この機にあたり、歴史地理学前進のためには、こうした新命題をひっさげての登場もまた十分に意義があるものと考えらる。

一九六八年九月

山口 恵 一 郎